

新人臨床実習指導者の精神看護学実習におけるやりがい感

中山 亜弓*・澤田 由美

新見公立大学看護学部

(2015年11月18日受理)

本研究の目的は、精神看護学実習における新人臨床実習指導者の体験を明らかにし、臨床と大学の連携および実習方法について検討することである。単科の精神科病院において、精神看護学実習の指導に携わる新人臨床実習指導者4名を対象に、半構成的面接法を用いたインタビューを行い、指導者の体験を質的帰納的に分析した。その結果、精神看護学実習において、新人臨床実習指導者は、指導技術を磨く、学生の達成感を支える、周囲のサポートを得ることでやりがいを感じていた。大学教員は学生の实習環境を整え、指導モデルを示すことで、指導者のやりがい感を支えることにつながることを示唆された。

(キーワード) 精神看護学実習, 新人臨床実習指導者, やりがい感

はじめに

精神看護学実習において、看護学生は精神疾患患者との関わりの中で、学生自身が感じたこと、気づきを大切にしながら、その場面を振り返り、経験の意味づけをし、疾患を抱えながら生活をしている患者への理解を深めていく学びをしている。臨床実習においては、大学教員による教育とともに、実際に患者ケアに当たっている臨床実習指導者による臨床教育が重要な意味を持つ。精神看護学領域においても効果的な臨床教育を実施するために、大学教員と臨床実習指導者との教育的連携のあり方を探り、両者による教育方法の十分な検討が必要である。精神看護学実習における学生への指導は、精神疾患患者との関係形成を助ける、患者理解を助ける、看護計画立案を支援・修正しながら実践を助ける、安心して実習できることへのサポートであり、患者の個性や必要なケア、そして学生の学習進度を把握し、適切な指導方法を持っていることが臨床指導者に求められる¹⁾。一方、学生や大学教員との関わりや連絡調整の難しさ²⁾、臨床指導者自身が抱える不安³⁾などにより、臨床実習指導者が指導に困難感を覚えることも明らかになっている。しかし、精神看護学領域における臨床指導者の抱える教育上のやりがい感と困難感に焦点を当てた研究が少なく、特にサポートを必要としている新人臨床指導者を研究対象とした研究も少ない。そこで、本稿では精神看護学実習における新人臨床実習指導者のやりがい感を明らかにし、臨床と大学の連携のための示唆を得たいと考えた。

I 研究目的

精神看護学実習における新人臨床実習指導者のやりがい感を明らかにし、臨床と大学の連携のための示唆を得る。

II 研究方法

1. 研究対象

本研究の対象者は、単科の精神科病院において、精神看護学実習の指導に携わる新人臨床実習指導者とした。本研究において「新人臨床実習指導者」とは、実習指導に携わって3年以下の臨床実習指導者を示すこととした。

2. 調査方法

調査方法は、半構成的面接法を用いた質的帰納的研究である。精神看護学実習における臨床指導者のやりがい感と困難感に関するインタビューガイドを作成し、対象者に1時間程度の半構成的面接法を用いたインタビューを行った。インタビューはプライバシーの保てる個室で行い、許可を得た上で録音した。

3. データの分析方法

分析は、インタビューを逐語録にし、データとした上で、対象者の語り全体の文脈に留意しながら、精神看護学実習における新人臨床実習指導者の体験を表すと考えられる文脈に着目し、その文脈が意味する内容を読み取り解釈し、コード化した。内容や特性の類似性から複数の概念を分類して統合する作業を繰り返し、カテゴリー

*連絡先：中山亜弓 新見公立大学看護学部 718-8585 新見市西方1263-2

化シラベルを付け、構造化した。分析過程において、データの信頼性を確保するためにスーパーバイズを受けた。

4. 倫理的配慮

研究協力者が所属する施設の研究倫理審査委員会の承認を得た上で実施した。

対象者には研究への参加は自由意思であること、研究参加の可否によって不利益が生じないこと、プライバシーへの配慮、得られたデータは研究目的以外には使用しないこと、匿名性の確保についてなどインタビュー前に十分に説明し、承諾を得た。インタビュー時の録音について、別途説明し同意を得た。また、インタビューは対象者が希望する場所で行い、施設に協力を求め、個室などを用意し行った。

III 結果

1. 対象者の概要

対象者は単科の精神科病院において、精神看護学実習の指導に携わる新人臨床実習指導者4名であり、指導者経験は1～2年であった(表1)。

表1 対象者の概要

	年齢	看護師 経験	精神科 経験	指導者 経験	指導者講習 受講歴
A	30歳代	11年	9年	2年	なし
B	40歳代	13年	11年	2年	なし
C	30歳代	12年	12年	1年	なし
D	40歳代	19年	12年	1年	なし

2. 精神看護学実習における新人臨床実習指導者のやりがい感

研究協力の同意が得られた精神看護学実習に携わっている新人臨床実習指導者4名の語りを分析対象とし、196のコードを抽出した(表2)。実習において、【指導技術を磨く】【学生の達成感を支える】【周囲のサポートを得る】のやりがい感を得ていた(以下、カテゴリ【 】, サブカテゴリ〔 〕とする)。

1) 指導技術を磨く

【指導技術を磨く】は、新人臨床実習指導者が指導をする際、学生に向き合い、自分自身の指導技術が高まることでやりがい感を得ていることを意味し、〔学生の言動に力をもらう〕〔自己を振り返る〕〔伝え方を工夫する〕〔学生の気持ちに関心を向ける〕〔余裕をもって関わる〕〔病態生理の理解を磨く〕〔学生の悩みに寄り添う〕〔実習指導の目標を描く〕から構成されていた。

〔学生の言動に力をもらう〕は、学生が患者に関わって

表2 精神看護学実習における新人臨床実習指導者のやりがい感

指導技術を磨く	学生の言動に力をもらう 自己を振り返る 伝え方を工夫する 学生の気持ちに関心を向ける 余裕をもって関わる 病態生理の理解を磨く 学生の悩みに寄り添う 実習指導の目標を描く
学生の達成感を支える	患者の理解を一緒に深める 看護介入を一緒に考える 学生の介入を支援する 成功体験につなげる
周囲のサポートを得る	情報を共有する 実習指導経験者の力を借りる 担当スタッフを巻き込む 病棟スタッフの力を借りる 上司の力を借りる 教員の力を借りる

いる姿勢やカンファレンスなどでの学びの発言から、新人臨床実習指導者自身が指導への力を得ることを意味し、「学生が一生懸命関わっているのがいい」「学生が考えてきた気持ちに応えようと思う」「学生の一生懸命さが伝わり教えてあげようという気持ちになる」などが語られた。

〔自己を振り返る〕は、実習期間中に学生と関わる中で新人臨床実習指導者自身が自己を振り返ることを意味し、「学生に関わることで自分の勉強になる」「実習をすることで、身近な人への関わりを見直すきっかけになる」「学生が気づかせてくれる」などが語られた。

〔伝え方を工夫する〕は、新人臨床実習指導者が学生に指導する際、自身の考えが学生に伝わるよう苦慮していることを意味し、「言葉を選んで伝える」「伝え方によって学生への伝わり方が違う」「思いを伝えたい気持ちが強い」などが語られた。

〔学生の気持ちに関心を向ける〕は、新人臨床実習指導者が学生の気持ちに関心を向け、思いが話せる環境を整えていることを意味し、「学生の悩みを早めにキャッチして関わるようにしている」「学生が困っていないか、カンファレンスで聞く」「学生は自分から言いにくいのではと思う」などが語られた。

〔余裕をもって関わる〕は、新人臨床実習指導者が指導を繰り返し経験する中で、心の余裕をもって学生に関わることができていることを意味し、「最初に比べて緊張は和らいでいる」「学生時代を思い出すと、できたことが役に立っている」「自分にゆとりができてきた」などが語られた。

〔病態生理の理解を磨く〕は、新人臨床実習指導者が学生指導を担当する際に自身の知識や技術を高める準備をすることを意味し、「参考書を読んで準備をした」「関連図の本を見た」などが語られた。

〔学生の悩みに寄り添う〕は、新人臨床実習指導者が学生に指導する際、学生の思いや悩みを汲み取り、理解しようとすることを意味し、「学生が変わっても悩みは同じと思えるようになった」「学生の大変さは理解できる」などが語られた。

〔実習指導の目標を描く〕は、新人臨床実習指導者が学生に指導する際、学生の実習目標に対する期待を意味し、「精神科の特徴を理解して欲しい」「看護の基本やコミュニケーションが大事であることを理解して欲しい」「実習での学びを一つでも得て欲しい」などが語られた。

2) 学生の達成感を支える

【学生の達成感を支える】は、新人臨床実習指導者が指導をする際、学生が患者の理解を深め看護介入をしていく中で、成功体験ができるよう支援し、学生の実習目標が達成できるよう支援することでやりがい感を得ていることを意味し、〔患者の理解と一緒に深める〕〔看護介入と一緒に考える〕〔学生の介入を支援する〕〔成功体験につなげる〕から構成されていた。

〔患者の理解と一緒に深める〕は、学生が患者と関わり得られた情報から、患者の病状や言動の理解と一緒に深めることを意味し、「患者の言動と一緒に考える」「患者が学生にしか話さない情報もある」「情報が不足していることをアドバイスする」などが語られた。

〔看護介入と一緒に考える〕は、学生が患者への看護介入をする際、患者の状態を考慮した計画・実施ができるよう一緒に考えることを意味し、「看護介入の計画と一緒に考えた」「学生の関わりから患者の変化が見られた」「学生の計画・行動の意味づけをする」などが語られた。

〔学生の介入を支援する〕は、学生が患者への看護介入をする際、学生が不安なく計画を実施できるよう支援することを意味し、「学生の計画が実施できるよう調整する」「学生の行動に責任を持つ」などが語られた。

〔成功体験につなげる〕は、学生が患者との関わりの中で、学生自身が成功体験できるよう支援していることを意味し、「成功体験をすることで自信が持てる」「学生の自信を持たせてあげることが大切」などが語られた。

3) 周囲のサポートを得る

【周囲のサポートを得る】は、新人臨床実習指導者が指導をする際、実習指導に関わっている病棟スタッフおよび大学の支援を活用することでやりがい感を得ていることを意味し、〔情報を共有する〕〔実習指導経験者の力を借りる〕〔担当スタッフを巻き込む〕〔病棟スタッフの力を借りる〕〔上司の力を借りる〕〔教員の力を借りる〕から構成されていた。

〔情報を共有する〕は、新人臨床実習指導者が指導をする際、同じ病棟で指導に関わっている臨床実習指導者と患者・学生の情報を共有することを意味し、「自分が指導したことを次へ伝える」「前日の指導者に相談する」「緊

張が強い学生の情報はスタッフも配慮している」などが語られた。

〔実習指導経験者の力を借りる〕は、新人臨床実習指導者が指導をする際、同じ病棟で指導に関わっている臨床実習指導者や上司と一緒に学生に関わることで、指導方法を自ら学んでいることを意味し、「指導の経験者と一緒にカンファレンスに参加する」「病棟の実習指導に経験者も含めて関わる」などが語られた。

〔担当スタッフを巻き込む〕は、新人臨床実習指導者が指導をする際、学生も病棟スタッフの一員として認め、患者の担当スタッフとも一緒に看護介入ができるよう調整していることを意味し、「受け持ち患者の担当スタッフに情報を聞いて、実習指導にあたる」「スタッフと学生の橋渡しを心がけている」「看護師の計画に学生を巻き込んでもらえるように、情報を伝える」などが語られた。

〔病棟スタッフの力を借りる〕は、新人臨床実習指導者が指導をする際、学生への対応について同じ病棟の実習指導者やスタッフに相談をしながら学生指導にあたっていることを意味し、「学生に答えることができないときはスタッフに相談する」「いろんなスタッフの考えや話を聞けばいいと思う」「学生の発言と自分の返答をスタッフに聞いてもらう」などが語られた。

〔上司の力を借りる〕は、新人臨床実習指導者が指導をする際、学生への対応について同じ病棟の上司に相談をしながら学生指導にあたっていることを意味し、「困った学生について上司に相談する」「患者の状態が変化した時の受け持ちの変更を上司に相談する」「上司の言葉が後押しになる」などが語られた。

〔教員の力を借りる〕は、新人臨床実習指導者が指導をする際、学生への対応について担当の教員に相談をしながら学生指導にあたっていることを意味し、「気になる学生については教員に聞く」「実習初日に学生の情報を教員から提供される」などが語られた。

IV 考察

新人臨床実習指導者は、精神看護学実習においてやりがい感、指導技術を磨くこと、学生の実習における達成感を支えること、周囲のサポートを得ることでやりがい感を得ていることが明らかとなった。

1. 新人臨床実習指導者のやりがい感を支える

1) 学生の体験の意味付け

学生にとって大切なのは、まず体験し、その意味を追求し、意味付けを行うことである。佐川ら⁴⁾が「自分の行った実践について、実践した意図は何か・そのときの患者さんの反応をどのように捉えたか・実践の評価はどうだったか、を言語化していくことが大切であり、それこそが

最も重要な実習指導者の役割である」と述べている。それと同時に細田ら⁵⁾が「専門的知識を伝達する側の活動がどのような動機付けに基づいているかによって学生の学習を方向付けることになる」と述べているように、新人指導者自身が指導を振り返り、行った指導実践に対し意味付けを行うことも重要で、自分自身の指導の評価ができ、指導者としての成長へとつながり、学生にとっての学びの方向付けができることがやりがい感を支えると考える。

2) 学生と共に学ぶ姿勢

学生の話に耳を傾け、学生を理解し、学生の個性を大事にする姿勢が指導者に生じていることが伺える。田村ら⁶⁾が「学生が感じ取っている『今』を臨床指導者が察知できる感性が望まれる」と述べている。学生が感じ取っていることや気づいたことを、学びとしてつなげられることが指導者の役割で、学生がなぜそう考えたのか、学生の思考の発端やプロセスをまずは知るといふこと、指導者自身も学生とともに学んでいこうという姿勢を保とうとすることがやりがい感を支える。指導者が自分自身も学ぶ姿勢を大切に指導することは、学生が学ぶために最も身近な存在であり、モデルとなり得るため、学生の学習意欲もさらに促進されると考える。

3) 患者中心の看護

精神科領域の特徴として、精神疾患は目に見えないものであり、同じ疾患でも患者によってその経過や症状は様々である。精神疾患患者は時として予測できない言動を示すことがあり、看護師は感情が動かされる体験をしている。指導者は普段行っている自分自身の何気ない行動や言動が看護であることを意味づけるため、普段の看護実践を振り返り、患者中心の看護を考えるプロセスを大切にすることが、学生の体験を意味付けることや学生と共に学ぶことにもつながり、学生の達成感を支えることにつながる。佐川ら⁷⁾は「看護過程もプロセスレコードも学生には、看護を理解する道具のひとつで、精神看護で学ばなければならない本質はその中身にある」と述べている。このことから、学生にとって自分の感情、反応、コミュニケーションパターンに気づき、さらには患者をより深く理解する手がかりとなるような再構成の指導は、対人関係について考える精神看護学実習において重要であり、患者中心の看護を考えるプロセスにおいて必要なツールと言える。

4) 役割モデルの存在

新人指導者は指導者としての少ない経験を基に指導を行っているため、上司や指導の経験者など、指導者の役割モデルとなる存在とともに実習指導を行うことで、指導方法や指導者の役割を直接学べる機会となっていた。さらに、目の前で行われた指導実践に対し、その場で意味づけすることが可能であり、またそれまでの自分自身

の看護に対する振り返りを与えてくれる存在となるため、指導者としてモデルがいることは、新人指導者にとっての目標となり、その存在に近づいていくことがやりがいにつながる。

2. 学生の実習指導における臨床と大学の連携

1) 指導モデルを示す

教員は新人指導者と共に学生のカンファレンスなど指導の場に参加し、教育的な指導のモデルを示すことも、新人指導者の指導技術を磨くというやりがいを支える。

2) 実習環境を整える

新人指導者はスタッフや大学の支援を実感することによってやりがいを得ていることから、教員は実習病棟の管理者と連絡相談しながら、実習環境を整えることが大切である。八重樫ら⁸⁾が「実習指導者への支援は、負担感のない状態で指導できる体制作りの一つとして、スタッフ全員で学生を受け入れていると実感できるように働きかけることが重要である」と述べているように、病棟全体で実習指導に取り組み、スタッフの関心を高め、協力を得やすい環境を作ることが重要であると考える。自己の指導を振り返ることのできる場の提供、行った指導に対する評価といった周囲からのサポートが必要である。そして、そのことが指導者としての知識や技術の向上となり、さらには指導者としての自信や自覚の習得につながると考える。そして石垣ら⁹⁾が「臨地実習指導に携わる指導者は、実習指導は自分自身の向上になり、また実習は看護教育にとって重要であることを認識し、実習指導を肯定的に受け止めている」と述べている。実習指導に携わることは自己成長のためでもあり、自分自身の存在が患者や学生にとって重要な役割であることを認識することで、さらに指導者としての成長ややりがいにつながると考える。

そして実習の場に教員がいることが、新人指導者の安心感にもつながっており、指導者は教員と相互理解を目指していることから、教員と指導者はともに連携を取れるような関係の中での学生指導が必要である。教員は臨床実習指導者を活用し、その時、その場の生きた教育を目指している。舟島¹⁰⁾は「看護実習における教材準備には限界があり、流動的な看護実践の場において発生する多様かつ複雑な現象をその時、その場で教材化する能力が教員には不可欠である」と述べている。精神科の入院患者は心身状態の変化の予測が難しく、その時々状態に合わせたタイムリーな対応が必要となるため、教員は指導者との連携により学生の学習環境を整える努力が必要である。

文献

- 1) 野坂幸江, 黒田道明, 田嶋長子: 臨床実習指導者が実践する精神看護学実習の指導内容 日々の指導内容記入用紙からの検討. 精神科看護, 40(5), 62-69, 2013.
- 2) 井上誠, 近藤美也子, 森岡佳隆, 他 8 名: 精神看護学実習の指導の方法について 教員と実習指導者で考える. 日本精神科看護学術集会誌, 56(2), 142-146, 2013.
- 3) 川崎裕美, 大川明子, 大谷五十鈴, 他 2 名: 臨床実習指導者の学生指導に対する不安内容の検討 臨床実習指導者と短期大学助手の不安内容の比較から. 広島県立保健福祉短期大学紀要, 5 (1), 99-104, 2000.
- 4) 佐川明美, 坂入和也: 精神科看護学臨床実習における当院の指導体制と実習指導者の役割. 看護教育, 41 (5), 378-383, 2000.
- 5) 細田泰子, 山口明子: 実習指導の教育的アプローチの特徴とその関連要因. 日本看護学教育学会誌, 14(2), 1-16, 2004.
- 6) 田村美子, 白木智子, 進藤美樹, 他 2 名: 看護学生が臨床指導者から受ける否定的ケアリング体験. 看護教育, 45(9), 748-752, 2004.
- 7) 前掲書 4)
- 8) 八重樫妹子, 本田彰子: 臨床指導者が指導上重要と考えていることと, 実際の状況. 日本看護学教育学会学術集会講演集, 13, 95, 2003.
- 9) 石垣美穂子: 看護婦の実習指導意欲の程度と意欲を減退させる原因の調査. 第21回日本看護学会集録(看護管理), 85-88, 1990.
- 10) 舟島なをみ: 看護学教育における授業展開 - 質の高い講義・演習・実習の実現に向けて. 第6章看護学実習と教授活動・学習活動, 医学書院, 173-225, 2013.

